

巻 頭 言

学術総会のあり方

前田 潔 日本精神神経学会理事
Kiyoshi Maeda

ちょうど広島での第106回総会から帰ってきてこれを書いている。学術総会の印象が強いのと、筆者が学会のあり方委員会学術総会部会に所属しているのでこのようなタイトルとなった。広島総会の印象から述べたい。印象を一言で言うと、整然として統制のとれた学会であったということである。事務局職員、会場の担当者など非常に親切で手際がよく、気持ちのいい対応であった。一部の会場で立ち見が出て、会場の大きさと予想参加者数との間に齟齬があったこと、各会場の出入り口で出てくる人たちとこれから入ろうとする人たちがぶつかり合っただけで少し混乱があったことなどが気になったが、事務局の人たちの態度がとにかく気持ちよかった。

私は、昨年、同じコンベンション会社に学会運営を依頼して総会を開催したが、昨年の事務局の人たちがこんなに気持ちのいい対応をしてきていたという印象はない。1年の間に事務局も成長したのだろうか。

あり方委員会学術部会では会長の選出の仕方、開催地の決め方などが議論になっている。会長の選出は現在では評議員による選出になっている。2008年の総会における選出を除けばほとんどただ一人の候補が票のほとんど（ただ投票率はせいぜい20～30%である）を占め、次点の候補でさえ3～5票である。すなわち、少しの組織票で会長が決まることになる。このことはほとんどの評議員は会長選挙に無関心であり、誰が会長になってもよいと考えているように受け取れる。会長はだれがなろうと構わないという程度のものであるという考えが間違いであるとは言えない。会長がどなたになろうと開催地と会長講演を除くと内容はあまり変わらないと言える。引き受け手がないというほうが大きな問題である。

ただいくつか変えたほうがよいのではないかとこの点もあつた。まずシンポジウムが150分と長いということであ

る。いま、150分のシンポジウムというのはあまりお目にかからない。90分から120分が適当ではないだろうか。また精神医学研修コースというのがある。教育的プログラムで有料となっている。安くない会場費を払って入場してさらに受講料を支払わなければならない。どういう契機でこのプログラムが始まったかは知らないが、推測するに特別に教育的内容であるから他の企画と異なり有料にしようとしたのか、参加者の少なかった頃の総会の収支の関係から有料になったからではないか。もしそうだとすれば現在の企画の中には「教育講演」や「専門医を目指す人の特別講座」などほかにも教育的内容の企画がたくさんあり、いずれも無料で参加できる。参加者が少なく総会運営上の収支の問題だとすれば、現在は精神医学研修コース（広島総会で500万円前後と推測される）を無料で開催しても十分黒字になるはずである。ただこの精神医学研修コースであるが、会員には大変好評で、広島大会でもほとんどのコースは売り切れ状態であった。これは存続してほしいという会員の意思の表明であるかもしれない。

ぜひ残していただききたいプログラムがある。学問性は低いかもしれないがわれわれ精神科医が真剣に考えなければならないような企画のシンポジウムである。社会性が高く、国の政策に係わりの強い企画である。こういう企画は政治的であったり、イデオロギー色が強かったりするが、こういう企画こそが本学会を特徴づけるものであり、本学会の多様性を示すものであり、学会の懐の深さを外に向かって発信しているものであると思うからである。最近、こういう企画が少なくなっており、こういう企画を提案する人たちが少し元気がないように見えるのは気がかりである。

最後に広島大会の関係者の方々には気持ちのよい学会をどうもありがとうございましたとお礼を言って巻頭言としたい。